

vol.

9

Mar.2020

市史編さん広報紙

## たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI

資料編、  
続々刊行。

令和2年4月から、資料編「古代・中世」、「現代1」、「柴崎の民俗」の頒布がはじまります。これに先立ち、部会特集（現代部会）では「現代」を描く資料」と題し、立川市の現代を概観しつつ、歴史研究における「現代」と資料の関係を、実例を交えて解説します。巻末の新刊紹介のページでも、各部会の部会長による資料編の見どころや解説を掲載しています。また、「資料をよむ」では令和2年度刊行予定の「近世1」の内容と関連して「～鈴木平九郎と近世文書社会：天保14年（1843）日野本郷地押一件日記から～」と題し、立川市の近世を語る上で重要な人物のひとりである鈴木平九郎が残した「公私日記」を通して、近世の文書社会について考察します。

新編立川市史編さん事業も6年目に突入し、これまで行ってきた調査の成果がいよいよ本格的に発表となります。「たちかわ物語」が立川市の歴史を知る手掛かりとなれば幸いです。

## 目次

・新しい市史の編さんによせて	2	・部会特集（現代部会）「現代」を描く資料	5～7
・第3期・立川市史編さん委員会委員	2	・令和元年10月～令和2年3月活動報告	11
・部会短信	3	・受贈図書・資料提供者	11
・「現代」という時代を、「歴史」として考える。	4	・新刊紹介	12
*連載*			
・資料をよむ～鈴木平九郎と近世文書社会：天保14年（1843）日野本郷地押一件日記から～			8～10



## 新しい市史の編さんによせて

立川市史編さん委員として新たに参加いただいた小林尚子さんに、立川市史に寄せる思いをうかがいました。

### 生活に密着した市史を… (小林 尚子 編さん委員)

令和元年の台風19号はとても大きな台風でした。立川市でも大雨特別警報が発令され、たくさんの方が一時避難をされていました。多摩川の増水で日野橋は橋脚が沈み、通行止めになってしまいました。

今回の台風で被害の多かった地域では、ハザードマップが準備されてなく、住民が被害の想定をしていなかった自治体があると報道されています。

立川市には土砂災害や浸水被害のハザードマップがあり、自分たちが避難をしなくてはならない地域であるか否かが事前にわかります。台風19号が来る前に、確認した方もいるでしょう。

このハザードマップがあるのも今までのデータや過去の記録の蓄積の賜物です。歴史は綿々とした記録の集合体であり、さまざまな事からへのヒントが詰まっています。

歴史は専門に学ぶ一部の人たちだけのものではありません。今、普通に暮らす全ての人たちの生活にも密接に関わっています。

防災という観点に立てば、いざという時にどのような行動を取ればよいか、普段、どのような準備をすればよいかなどということが、過去の事例である市史を読むことによってさらに深められると思います。

立川市史は前に刊行されてから50年以上の歳月が経っています。半世紀の新たな資料が加わって、新しく刊行される市史が、さらに生活に役立つ身近な歴史書の一冊になることを楽しみにしています。



## 第3期・立川市史編さん委員会委員

立川市史編さん委員会は、市長の諮問機関として設置され、市史編さんに関する基本的な事項について審議します。このたび、第3期の立川市史編さん委員会が始まりました。任期は令和元年9月1日から2年間です。

職名	氏名	所属等
委員	大友 一雄	国文学研究資料館教授
委員	小林 尚子	公募による市民
委員	白井 哲哉	筑波大学図書館情報メディア系教授
委員	杉山 章子	公募による市民
委員	鈴木 功	前立川市文化財保護審議会会長
委員	豊泉 喜一	立川市文化財保護審議会会長
委員	檜崎 茂彌	多摩戦時下資料研究会
委員	保坂 一房	たましん地域文化財団歴史資料室長
委員	和田 哲	立川市文化財保護審議会委員

※委員長・副委員長は、3月19日開催予定の編さん委員会会議にて決定 (敬称略・50音順)



## 部会短信 (令和元(2019)年度後期)

## 先史部会

資料編の作成・編集作業を本格的に開始し、現在は向郷遺跡の縄文時代中期の資料を中心に図版作成を進めています。報告書については、大和田遺跡第1次・第3次地点の出土資料の再調査を終了し、第4次地点に着手しています。また、昨年9月に実施した沢船荷(柴崎町四丁目)の地中レーダー探査の解析が終了しました。これらの調査成果は、令和2年度末にそれぞれ報告書として刊行する予定です。砂川地域で採集された石器の調査も引き続き進めており、現在は個人所蔵および立川市歴史民俗資料館所蔵の宮崎礼氏報告資料を中心に実測を進めています。



砂川地域で採集された石器の実測

## 古代・中世部会

埼玉県鴻巣市で、戦国時代に岩付館を拠点として活躍した立川伊賀守・石見守父子について調査を行い、子孫宅に残されている過去帳から伊賀守・石見守の法名を確認しました。集落が管理する薬師堂では石見守の子孫立川勘兵衛の位牌を調べました。日野市の佐藤彦五郎新選組資料館では、天正14年(1586)に北条氏照が立川領での竹木伐採を禁止した朱印状を調査しました。武蔵国最古の刊経として知られてきた普濟寺版刊経については、春に実施した京都大学人文科学研究所ならびに京都大学付属図書館での調査に続き、東洋文庫、大東急記念文庫、立川市歴史民俗資料館でも調査し、立川に関連する助縁者名や在所名が確認できました。



鴻巣市上谷薬師堂での調査風景

## 近世部会

令和2年度末に刊行する『資料編 近世1』の準備を進めています。これまでに集めた古文書をもとに、資料の来歴を尊重しつつ、わかりやすい本になるよう、委員全体で本の構成について議論を重ねています。解説の準備にも着手し、市民の皆さまにとって魅力的な市史になるよう目指しています。『資料編 近世1』には柴崎地区の資料を掲載しますが、続く『資料編 近世2』の刊行に向けて、砂川地区の調査も本格的に開始しました。

近世部会では引き続き古文書の情報を集めています。1点でも構いませんので、情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、市史編さん担当までご一報いただくと幸いです。



掲載資料について議論する様子

## 近代部会

令和2年度末に刊行予定の『資料編 近代2』と令和4年度末に刊行予定の『資料編 近代1』に向け、引き続き掲載資料の選定作業と、資料に記された文章の解説や表作成を通じ、原稿化する作業を進めています。資料調査では西砂町の民家で所蔵されていた用水関係資料の整理を行いました。また、市史編さん室内でも寄贈資料の整理・撮影を行いました。その資料の一つに『銀翼』があります。立川飛行機会社を敵国の謀略対象より秘匿するため『立飛社報』から改題したものです。昭和19年(1944)2月号(通巻48号)は慰安演芸会の写真グラフ、警視總監などによる飛行機増産を奨励する記事、青年学校新聞、社員文集などを中心に構成されています。



『銀翼』発行所『銀翼』通巻第48号の表紙

## 現代部会

現代部会単独では初となる刊行物、『資料編 現代1』を無事に刊行することができました。戦後もなくから立川市・砂川町の合併までの資料を様々な分野にわたって収録しています。お手に取っていただければ幸いです。

つづいて令和3年度に刊行が予定されている『資料編 現代2』に向け、市内各所や市外諸機関に所蔵されている立川市関係資料の調査・収集を本格的に行っていきます。まずは公文書から調査を進めていますが、本号部会特集でご紹介したように、個人蔵資料も行政文書と同様に重要です。皆さまからの資料・情報提供をお待ちしております。



市広報から移管された記録写真(立川市歴史民俗資料館蔵)

## 民俗・地誌部会

編集作業を進めておりました『資料編 柴崎の民俗』を無事刊行しました(令和2年3月)。柴崎地区(柴崎村にあたる範囲:旧立川市域)の様々な民俗についてまとめています。内容については新刊紹介(12ページ)をご覧ください。並行して『資料編 砂川の民俗』の刊行(令和3年度末)に備えた民俗調査も進め、2月には南砂川の方々からお話を伺う共同調査(座談会)を行いました。柴崎地区の調査も継続しており、土地のことは(方言)についての調査を進めています。調査にご協力いただいた皆さまに厚く御礼申し上げます。今後ともご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。



南砂川での共同調査にて、砂川町の人を見ながら地元の方からお話をうかがう

# 「現代」という時代を、 「歴史」として考える。

立川市の市史編さん事業は全部で6つの部会に分かれて作業を進めています。そのうち、人々の生活などを調べている民俗・地誌部会を除くと、時代ごとに区切られた5つの部会があります。古い時代から順に、先史、古代・中世、近世、近代、現代と分かれており、もっとも新しい時代を担当する部会が「現代部会」という名称になっています。

では、「現代」とはいつの時代をさすのでしょうか。「現代」という言葉は、「いまの時代」という意味です。時が流れて「いま」が変われば、「いまの時代」がさすものも変わっていきます。そのため、「いつからいつまでが現代」とははっきりと決めることは難しく、これを「歴史」として考える場合はなおさらです。たとえば前回の「立川市史」が刊行された1960年代には、「現代」を歴史として見た「現代史」は昭和のはじめごろ、つまり第二次世界大戦よりも前を含んでいました。戦前に生まれた当時の人々にとっては、戦争も「いまの時代」の一部だったのです。

それから時が流れ、現在では「現代史」というと、第二次世界大戦後のことをさすことが多く、立川の市史編さん事業でもこの区分を採用しています。「いま」の社会は憲法をはじめ、戦後の改革の影響がとても大きいからです。しかも立川の場合、日本陸軍の飛行場が占領を経て米軍の基地になったことも、「いま」につながる変化の大きな要因となりました。

時につれ変わる「いまの時代」に共通していることは、その時代の人々が生きてきた時代である、ということです。そうした「いま」を歴史として捉え直すための資料は、土の下に眠っている遺物や、代々受け継がれてきた古文書のような、いかにも「歴史」という言葉から連想されるものばかりではありません。現代部会が向き合っているものは、歴史は歴史でも「いまの時代」の歴史なので、私たちの「いま」の生活と地続きの資料が、「いま」を分析するために重要な意味をもってくるのです。

(写真：平成11年(1999)撮影)



# 「現代」を描く資料

## 現代部会が扱う時代のできごと

昭和20(1945)年8月15日 敗戦

砂川

昭和29年(1954)  
砂川町制施行



昭和30年(1955)  
基地拡張反対闘争(砂川闘争)始まる



昭和20年(1945)  
米軍の進駐

立川

昭和26年(1951)  
立川飛行場閉業

昭和27年(1952)  
市内一帯で地下水汚染  
上水道の緊急整備進む

昭和34年(1959)  
立川市とサンバーナディノ市が姉妹都市に



昭和38年(1963)  
立川市・砂川町合併



昭和30～40年代  
団地建設ラッシュ(写真は富士見団地)



昭和52年(1977)  
米軍立川基地の全面退避



昭和58年(1983)～  
国営昭和記念公園・防災基地等  
基地跡地の開発進む



平成10年(1998)  
多摩都市モノレール開業  
同12年(2000) 全面開通



平成6年(1994)  
ファーレ立川まちびらき

平成22年(2010)  
JR中央線三鷹駅・立川駅間中央線連続立体交差事業完了

平成27年(2015) 立川駅南口土地区画整理事業完了

## ●現代のできごと

現代部会が担当している昭和20年(1945)から「いま」まで、今年でちょうど75年になります。まさに「いま」立川に暮らす市民の方々が生きてきた時代なので、あまり「歴史」という感じがしないかもしれません。まずは立川ではどんな大きなできごとがあった時代なのか、振り返ってみます。

現代はとても近い時代であることもあり、「できごと」を知ることは簡単なように思えます。しかし、ほんの少し前のできごとであっても、その背景や展開、影響などを検討するためには、多様な資料が必要となります。

たとえば、立川市と砂川町の合併について、合併した日付は官報などですぐに調べることができます。ですが、なぜ立川市と砂川町がその日に合併したのか、当時の人々が合併をどう考えていたのかを知るためには色々な記録を組み合わせる必要があります。

では、実際にどのような資料になるのでしょうか。

資料編 現代1 (令和元年度刊行)

資料編 現代2 (令和3年度刊行予定)

## ● 公文書と私文書

今春刊行の「資料編 現代1」には、昭和20年(1945)から昭和38年(1963)、立川市と砂川町が合併するまでの時期についての資料を集めました。市が保管していた行政文書をはじめとして、市の歴史民俗資料館や市外各所の資料保存機関に残っているもの、さらに個人からの寄贈・借用資料まで、さまざまな来歴の資料が掲載されています。そうした資料にはいろいろな基準による分類がありますが、よく使われるもののひとつにその出自から大きく「公文書」と「私文書」の二通りに分ける方法があります。

公文書は自治体などの公的機関が業務のために作成した文書です。公文書がしっかりと残っていることで、さまざまなできごとに対して、市・町がどのように動いたのかを知ることができます。これらはとても重要な資料であり、資料編でも市が保管していた公文書を多数掲載して立川市や砂川町の自治体としての足跡をたどれるようにしています。

しかし、歴史を描くためには、それだけでは不十分です。公文書はその機関が業務のために作成したものであるため、もっぱらその機関の目線で記録されています。そのため、公的機関の業務との関連が薄い部分は、公文書には残りにくくなっています。

その意味で重要になるのがもう一方の分類である私文書、つまり公的機関ではない民間の団体や個人などが作成し残した資料です。私文書には、前ページで見たような大きなできごとに対して、地域の人々がどのように考えどのように動いたのか、といった公文書に残されたできごとを別の角度から見るができるものもあれば、市民独自の催し事や文化的・社会的活動などの、公文書からは存在をつかむこともできないことがわかるものもあります。

「いま」を描くためには、このように幅広い資料から人々のいとなみを捉えることが欠かせないのです。

## 事例① 立川市・砂川町の合併をめぐる

公文書では…

合併にあたっての立川市と砂川町の交渉の経過など、行政の内側を記録した資料が確認できています。

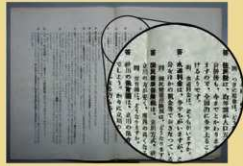
右の資料では、市町村合併をめぐる動きが時系列に沿って記録されています。

(立川市蔵)



私文書では…

立川市との合併について当時の自治会が同一答形式でまとめた資料が見つかりました。当時の人々が合併にどのようなことを期待していたかを考える手がかりとなる資料です。



(立川合併とは、どんなことでしょうか、中野家より寄贈)

## 事例② 文化活動のひろがり

公文書では…

社会教育や文化政策の拠点である公民館の建設の経緯や活動方針、実際に開かれていた行事に関する資料が見つかります。

文化的催しのほか、農業技術の講座などもありました。



昭和34年(1959)の砂川町公民館

私文書では…

青年団や婦人会の資料が個人所蔵資料からまとめて確認できたほか、市民の手で刊行された言論誌などが見つかり、市民の文化的活動が豊かなひろがりをもっていたことが跡付けられています。

これらの資料にとどめられたできごとは公文書には残っていない、個人が保管してきた私文書が貴重な記録となっている実例です。



(立川文化会「知性」、昭和23年(1948)発行、中野家より寄贈)



(市民合唱会プログラム、荒井家蔵)



昭和34年(1959)砂川町ジュニアリーダー講習会のような



昭和39年（1964）10月、前回の東京五輪では、聖火リレーが日野橋を通過しました。

スポーツの祭典、ふたたび

男女平等社会の  
 実現へ向けて



ファレール立川には男女平等参画の拠点施設として、女性総合センター・アイムがつくられました。



基地跡地に開業した国営昭和記念公園は、商業振興の行事も多数催されます（写真は平成10年バカヤリ市）。

「商都」へのあゆみ



「消費者問題」という言葉ができたのも、この50年余りのことですよ（写真は平成10年）。

「消費者問題」の  
 出現



バリアフリーなどの取り組みは、官民両面から進められています（写真は平成14年の西立川駅改修時）。

多様な人々の  
 協働する社会へ

●「現代」を「歴史」として編むために

これから現代部会が編さんに取り組む「資料編現代2」は、昭和38年（1963）の合併によって生まれた新・立川市を対象とします。区画整理と再開発、道路網の整備、米軍基地の返還と跡地利用、多摩都市モノレールの敷設など、まちづくりが推進された時代といえるでしょう。

全国に目を向けると、経済的には高度成長からオイルショックを経てバブル景気と長期不況、そして現在まで続く景気回復を目指した苦闘に至る時代です。社会の面では核家族の増加やライフスタイルの変容、少子化・高齢化の進行など、暮らしにさまざまな変化が起こった時代にあたります。立川の人々はそのような影響を受け、市がこれにどのように対応したかという点も検討しなければなりません。

また、社会・福祉政策や生涯教育政策が充実する一方、それまでの地域コミュニティのあり方が変わっていくなど、人々の日々のいとなみも、変化していく社会情勢の影響を受けた時代でもあります。

これらの分野では、公的な対応がなされるのに先んじて、変化に直面した人々のあいだで問題の検討や対策が模索されてきた場合もあり、公文書でない資料の重要性がますます高まる時代といえます。

「資料編 現代2」で取り扱うべきことは、「経験」として記憶されている方も多いことと思います。市史編さん事業では、それを「歴史」として編みなおす作業を進めていくことになります。

そのためには、多様な視点からの資料が必要不可欠です。その時々、人々が何を考え、何をしていたのか。PTAやサークル、勉強会など各種の団体の記録、イベントの案内、地域の集まりの資料といったものから、まちの風景の写真や映像、日記などが、現代史を編む上では重要な資料となります。

また、まちの大きなできごとに際して市などから配布された広報物や説明会資料といった公文書の性質をもつものが、個人によって保管されている場合もあります。

「ああ、あときの」と思い出させるものが、「あとき」を「歴史」として描くための資料にもなるのです。（渡邊）

市史編さん事業も現代部会の作業もまだ折り返しを迎えたばかりです。引き続き資料収集を進めていますので、もしかしてこれも、というものがあれば、ぜひとも市史編さん担当までご一報ください。

# 資料をよむ

～鈴木平九郎と近世文書社会：  
天保14年（1843）日野本郷地押一件日記から～

近世部会部会長 富善一敏

## はじめに

江戸時代は、人びとの意思や行動が文書により記録され、後世に伝えられる文書社会といえます。その特徴として、

- 1) 幕藩領主は、みずからの政策決定や業務遂行の際に膨大な文書を作成し保管した。
- 2) 幕藩領主は、村や町との間で文書をやりとりすることで支配を行うが（文書による支配）、その過程で名主などのリーダーの家に文書が蓄積し保管され、自らの主張の根拠として利用された（文書による保証）。
- 3) 商業取引や土地売買、金銭借用などのさまざまな契約が文書で行われるため、文書の読み書き能力がないと、自己の利益・権利を守れなかった（証文の時代）。

の三点をあげることができます。

この小文では、柴崎村の名主であり、「公私日記」の作者として著名な鈴木平九郎が、天保14年（1843）に作成し、現在に伝わる日野本郷地押一件日記（「天保十四卯年十月十日より同十一月六日御用済夫より次々 日野本郷地押取調御用中日記 柴崎村平九郎控」鈴木家文書 E41、立川市歴史民俗資料館寄託、【写真1】）を手がかりに、江戸時代後期の文書社会のあり方について考えてみたいと思います。



【写真1】

## 地押一件の経過

江戸幕府の老中水野忠邦は、天保改革の一環として、全国の幕府領を対象に、天保14年（1843）に御料所改革を行いました。御料所改革とは、村方に小前帳・内見帳・耕地絵図の作成を命じ、代官が現地見分し耕地を一筆ごとに照合して、村の全ての耕地を再把握し、本免入り（年貢地への編入）や免上げ（年貢率の引き上げ）により、年貢徴収量の増加をめざしたものです。柴崎村では8月から9月にかけて、当時36歳の名主平九郎を中心に行われました。

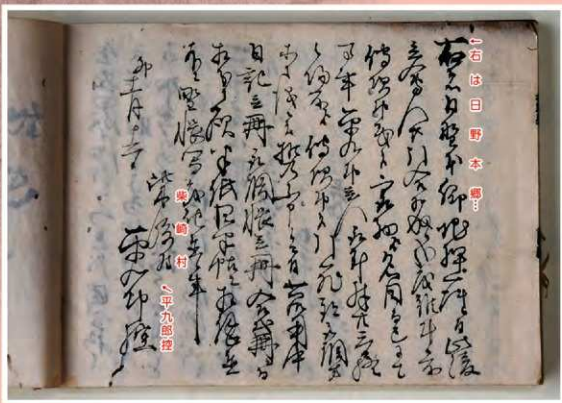
御料所改革は、老中水野の失脚に伴い閏9月下旬に中止されましたが、幕府代官江川太郎左衛門は耕地の再把握自体は必要だとして、作業を続行しています。

【写真2】天保14年「日野本郷絵図」（天野尚家所蔵、日野市郷土資料館写真提供）。日野本郷は日野宿とも呼ばれ、甲州道中の宿場でした。甲州道中に沿って北は柴崎村、西に葉須新田（現八王子市）と接し、宿往還の長さは1里1町（約4キロメートル）という大きさの村でした。現在の日野市日野本町、日野、神明、栄町、大坂上、日野台といった区域に該当します。









【写真4】「日野本郷地押立会中留書」を加工

11月7日に平九郎は、当一件について記した別の記録の中で、

右は日野本郷地押一件に付き、此後立会人共引き合いあい成り候哉も計り難く候所、伝次郎義は最初より名目のみにて、万事平九郎老人取り計らい、殊に廿三日終の場所より伝次郎は引き籠り、跡取調方等の儀には携り申さず候に付き、右御用中日記老冊、取調帳老冊、合式冊にてあい分り候様、半紙四半帖にあい認め置き、外に野帳写しも記し置き候事

と述べています（「天保十四癸卯年十月十一日より十一月六日迄 日野本郷地押立会中留書 柴崎村平九郎控」鈴木家文書E44、立川市歴史民俗資料館寄託、【写真4】、読点を付し読み下し文に改めた）。地押作業に立ち会う栗須村名主伝次郎は名目だけで、23日以降は病気のため引き籠もり、実務は全て自分が行ったこと、今回の地押のあらましが分かるように、日記と取調帳の2冊を作成したことが分かります。

## むすびにかえて—地域の中で、地域のために文書社会を生きる—

平九郎が作成した当一件の関係文書は、日野本郷田方一筆限地改野帳写4冊、田畑御取箇辻突合勘定帳1冊、荒地起返書上下帳1冊、田畑起返本免入御取下免増取調帳1冊、組々名寄反別改書抜帳1冊、同御用中日記3冊、同留書1冊など、実に23点にのぼります。翌天保15年1月晦日に、書役豊吉に地押野帳を筆写させ、同年11月25日には、「見合」のため日野本郷名主の彦五郎に貸し出されていた平九郎留書1冊が、平九郎に返却されています。平九郎は、このように自らの仕事を文書に記録し保存し、地域のために活用したのです。

19世紀に柴崎村に生きた鈴木平九郎は、「公私日記」をはじめ多くの文書を作成し、現在に残しました（立川市史編さん近世部会編集『新編立川市史 調査報告書 近世編1 鈴木家文書目録』立川市、平成30年）。現在、公文書管理のあり方が問題となっていますが、この小文で取り上げた日野本郷地押一件日記から読み取れる平九郎の姿勢に、私たちが学びたいと思います。

【付記】本稿は、2019年（平成31）1月19日の新編立川市史関連講演会で筆者が行った講演「鈴木平九郎と近世文書社会—「公私日記」を中心に—」の一部である。



## 令和元年10月～令和2年3月活動報告

月	日	活動内容
10月	17日	先史部会・近代部会・砂川資料調査および現地確認調査
	18日	第3回・現代部会会議
	18日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	24日	現代部会・特定部会会議
	28日	第1回・先史部会会議
11月	11月中	資料編・初校校正作業
	2日	古代・中世部会・普濟寺版経典調査（歴史民俗資料館）
	15日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
12月	19日	先史部会・近代部会・砂川資料調査
	12月中	資料編・再校校正作業
	13日	先史部会・大和田遺跡第1次・第3次・第4次調査資料の実測委託
	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	21日	第3回・近世部会会議
	22日	第3回・近代部会会議
	23日	民俗・地誌部会・立川巡見
	24日	先史部会・近代部会・砂川資料調査
	25日	現代部会・特定部会会議
26日	第4回・現代部会会議	

月	日	活動内容
1月	17日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	19日	新編立川市史関連講演会
	下旬	資料編・三校校正作業・校了
2月	22日	先史部会・近代部会・砂川資料調査
	10日	第2回・民俗・地誌部会会議
	21日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
3月	24日	民俗・地誌部会・南砂川座談会
	13日	先史部会・大和田遺跡第1次・第3次・第4次調査資料の実測委託および地中レーダー探査委託の完了 資料編『古代・中世』『現代1』『柴崎の民俗』刊行
	19日	第11回・編さん委員会議
27日	第11回・編集委員会議	



令和元年7月から継続している砂川個人宅調査の様子

### 受贈図書・資料提供者（平成31年1月1日から令和2年1月31日まで）

以下にご芳名を掲載し謝意を表します。（敬称略・五十音順）

※資料借用をさせていただいた方のご芳名は除きます。

【個人】安孫子昭二、老川慶喜、粕谷正夫、加藤良明、保坂一房、渡辺晶彦

【機関】市川市文化スポーツ部文化振興課文学ミュージアム、印西市立木下交流の杜歴史資料センター市史編さん班、小金井市生涯学習部生涯学習課、狛江市企画財政部市史編さん室、世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん担当、立川観光協会たちかわまちの案内人ボランティアの会、羽村市企画総務部市史編さん室、八王子市立郷土資料館、日野市立図書館市政図書室、立川・昭島・国立聖苑組合、立川市柴崎学習館、立川市富士見町二丁目自治会、府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当、有限会社くえてびあん

### 市史編さん広報紙 *たちかわ物語* vol.9

令和2（2020）年3月19日発行

発行 立川市

〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

編集 産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん担当

〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201

TEL (042)506-0021 / FAX (042)525-1601

E-mail [chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp](mailto:chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp)

URL [http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi\\_top.html](http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html)

印刷 ぎょうせいデジタル株式会社

【市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています】

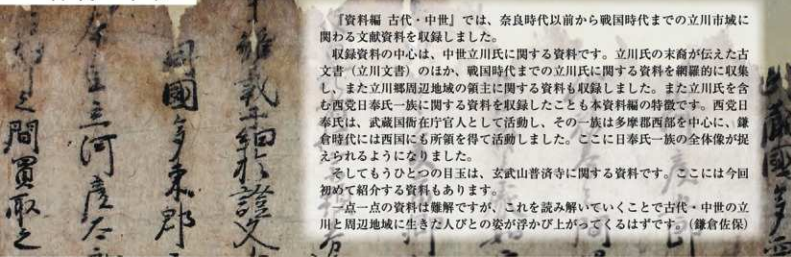


市史編さん広報紙はこちら  
からアクセスできます。

# 新刊紹介

令和2年4月頒布の新編立川市史資料編について、各部会の部会長が概要や見どころをご紹介します。

## 古代・中世



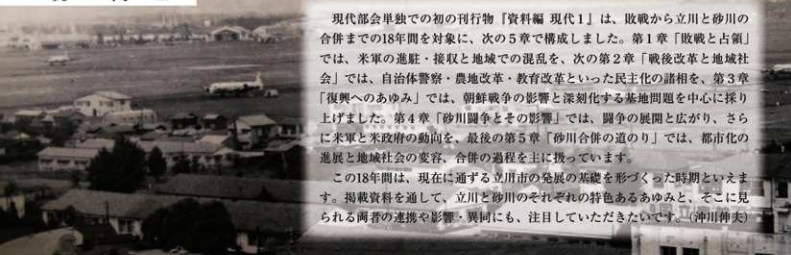
「資料編 古代・中世」では、奈良時代以前から戦国時代までの立川市域に関わる文献資料を収録しました。

収録資料の中心は、中世立川氏に関する資料です。立川氏の末裔が伝えた古文書（立川文書）のほか、戦国時代までの立川氏に関する資料を網羅的に収集し、また立川郡周辺地域の領主に関する資料も収録しました。また立川氏を含む西党日奉氏一族に関する資料を収録したことも本資料編の特徴です。西党日奉氏は、武蔵国衛在庁官人として活動し、その一族は多摩郡西部を中心に、鎌倉時代には西国にも所領を得て活動しました。ここに日奉氏一族の全体像が捉えられるようになりました。

そしてもうひとつの目玉は、玄武山普濟寺に関する資料です。ここには今回初めて紹介する資料もあります。

一点一点の資料は難解ですが、これを読み解いていくことで古代・中世の立川と周辺地域に生きた人びとの姿が浮かび上がってくるはずです。（鎌倉佐保）

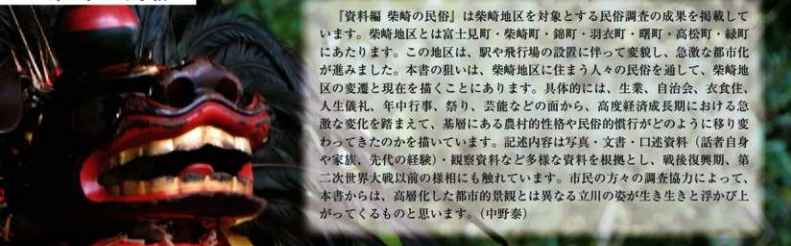
## 現代 1



現代部会単独での初の刊行物「資料編 現代1」は、敗戦から立川と砂川の合併までの18年間を対象に、次の5章で構成しました。第1章「敗戦と占領」では、米軍の進駐・接収と地域での混乱を、次の第2章「戦後改革と地域社会」では、自治体警察・農地改革・教育改革といった民主化の諸相を、第3章「復興へのあゆみ」では、朝鮮戦争の影響と深刻化する基地問題を中心に採り上げました。第4章「砂川闘争とその影響」では、闘争の展開と広がり、さらに米軍と米政府の動向を、最後の第5章「砂川合併の道のり」では、都市化の進展と地域社会の変容、合併の過程を主に扱っています。

この18年間は、現在に通ずる立川市の発展の基礎を形づくった時期といえます。掲載資料を通して、立川と砂川のそれぞれの特色あるあゆみと、そこに見られる両者の連携や影響・異同にも、注目していただきたいです。（沖川伸夫）

## 柴崎の民俗



「資料編 柴崎の民俗」は柴崎地区を対象とする民俗調査の成果を掲載しています。柴崎地区とは富士見町・柴崎町・鉦町・羽衣町・曙町・高松町・緑町にあたります。この地区は、駅や飛行場の設置に伴って変貌し、急激な都市化が進みました。本書の狙いは、柴崎地区に住む人々の民俗を通して、柴崎地区の変遷と現在を描くことにあります。具体的には、生業、自治会、衣食住、人生儀礼、年中行事、祭り、芸能などの面から、高度経済成長期における急激な変化を踏まえて、基層にある農村の性格や民俗の慣行がどのように移り変わってきたのかを描いています。記述内容は写真・文書・口述資料（話者自身や家族、先代の経験）・観察資料など多様な資料を根拠とし、戦後復興期、第二次世界大戦以前の様相にも触れています。市民の方々の調査協力によって、本書からは、高層化した都市的景観とは異なる立川の姿が生き生きと浮かび上がってくるものと思います。（中野泰）

## 既刊好評発売中！

頒布場所：

立川市役所本庁3階市政情報コーナー  
立川市歴史民俗資料館  
オリオン書房ノルテ店  
ジュンク堂書店立川高島屋店

新編立川市史 資料編  
地図・絵図

A4判・フルカラー・約200ページ・DVD付・価格3,000円

調査報告書

先史編1 向郷遺跡 竹内男典氏寄贈資料調査報告書

A4判・約200ページ・価格1,000円

民俗地誌編1 砂川青年団資料集

A4判横・約550ページ・価格1,500円

近世編1 鈴木家文書目録

A4判・約250ページ・価格1,000円